



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

NEWSLETTER No. 103

July 2025

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長：森田 彰)

事務局 〒310-8585 水戸市見和1-430-1  
常磐大学人間科学部 千葉敦研究室内

HP <http://www.j-let.org/>

## 巻頭言

### ご挨拶

会長 森田 彰 (早稲田大学)

コロナ禍から、新たな日常が始まった 2024 年は、令和の本格的な始まりを告げる年ともなったように思えます。その意味でも、中部支部をホストとして催された今年度の年次研究大会 (旧全国研究大会) のテーマは「令和の教育改革 — 未来の外国語教育をデザインする — Educational Reform in the Reiwa era - Designing the Foreign Language Education of the Future」であり、新たな時代を迎えた私たちにとって令和の教育・研究を考える極めて良い機会となりました。改めて実行委員会の皆様に感謝いたします。

新たな時代の幕開けは、生成 AI とともに始まりました。生成 AI の登場を第 4 次産業革命と呼ぶ人もいます。知人の政治学者 John Ikenberry 教授 (Princeton) は、「第 4 次は、従来の産業革命に比べてはるかに大きな影響を及ぼすと目されている。」(読売新聞 2 月 24 日) と評しています。教育の分野でも、これはかなりの実感を持って言えるのではないのでしょうか。特に、Writing、Speaking といった production を成果として期待する領域では、学習観、教育観、そして評価の在り方への抜本的再検討が必要になっています。テクノロジーが、日常生活の常態の隅々にまで入り込んだ現在、あらゆる分野で様々な角度からの再検討が避けては通れないことは、間違いありません。

新たな時代に訪れた大波に立ち向かい、これを活用していこう、ということは、まさに LETらしい態度、方向性と言えるでしょう。そのためには、現状の正しい認識とある種の見極め、見通しが必要になります。その機会が、関西支部をホストとする 2025 年度の年次研究大会 LET64 であり、大会テーマは「言語教育とテクノロジーの新しい波を乗り越なす (Surfing the New Big Wave in Language Education and Technology)」と設定されています。2025 年 6 月に big wave 本場 Hawaii の the University of Hawai'i at Mānoa で行われる提携学会 IALLT 主



### 目次

巻頭言 .....	1
追悼 .....	3
全国研究大会を終えて .....	5
2024 年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿 .....	7
第 60 回 (2024 年度) 全国研究大会報告 .....	10
2023 年度本部事業報告・決算報告 .....	23
2024 年度本部事業計画・予算 .....	25

催の FLEAT 8 での成果も踏まえ、活発な議論がなされることを期待しています。大阪万博を考慮し、11月22日、23日に開催される次回年次研究大会で、多くの会員、新会員の皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

## 羽鳥博愛先生の思い出

LET 元会長 柳善和 (名古屋学院大学)

羽鳥博愛先生(東京学芸大学名誉教授)が昨年2024年1月30日に前立腺がんのために97歳でご逝去された。死没日付をもって従四位に叙され、瑞宝小綬章を追贈されました。

羽鳥先生は、LET(LLA)の第六代会長として、1994年から1997年まで務められました。LETの他に、日本英語検定協会の会長をはじめ、いくつもの学会の会長をおつとめだつたと記憶しています。先生は、茨城県出身で東京帝国大学文学部英文科卒業、東京大学大学院人文科学研究科教育心理学博士課程修了(旧制)され、東京学芸大学助教授、教授、1990年定年退官、名誉教授であられ、LETの会長時は聖徳大学人文学部教授をされてみえました。1995年に「LLAを考えるプロジェクトチーム」を発足され、学会名改称のためにご尽力されました。そして、2000年からLETに名称変更されました。日本の英語教育の先駆者のお一人であり、『心理言語学と英語教育』(英語指導法叢書)(1982)大修館書店や、『国際化の中の英語教育』三省堂(1996)のご専門の著書の他、『LL指導の理論と実践1台のTRからフルラまで』編著 桐原書店(1977)、『視聴覚教材づくりと活用 機器の新しい役割』(英語教育シリーズ)中教出版(1980)等を著され、新しいことをどんどん取り入れる方でした。一方で、保守的なところもあり、常識人でもあられました。LETの会長になられたのも、このような羽鳥先生のお人柄だと思います。

LET(LLA)中部支部での思い出としては、1995年中京大学(名古屋校舎)で開催された全国研究大会のことです。当時、私は事務局長であり、研究大会の『発表要綱』作成のために、中部大学の外国語研究センターで、徹夜で投稿原稿の作業をしていました。翌日が、印刷所に引き渡すための締め切り日でした。

電子メールがギリギリ使えた程度で、現在の様にフォントの指定とかサイズの指定など、事務局で原稿の体裁を修正するなどのことは難しかったため、『発表要項』に掲載するために手作業で、発表予定者から送られてきた原稿のコピーをとって、ページ順に整理整頓をしていました。

この時に、学会長の挨拶の原稿が届いていなくて、羽鳥先生のご自宅に電話してもいいものか?さんざん迷ったことを今でも覚えています。逡巡の後、意を決して、(どのように切り出すかをずっと考えた後)、電話をかけました。羽鳥先生が電話に出られたので、私が「発表要綱の巻頭言の件ですが…」とお話を始めると、「あ、明日の午前中にはファックスで送るから大丈夫だよ(当時は、現代のようにメールが自由に使える状況ではなかったの)。」と言って頂いた。私は安心して「ありがとうございます。よろしく願いいたします。」と電話を切ったことを今でも鮮明に覚えています。もっともそれでも心配で、翌日の午前中には、(本当に原稿が送ってくるだろうか?)と思い、もう一度かけました。何度も電話をかけてくる私に対して、羽鳥先生は、「ああ、もうすぐ送るから待って下さい。」と優しく言われました。その後、羽鳥先生に色々な学会でお目にかかるたびに、ご挨拶をさせていただきましたが、いつも穏やかで温和で、「最近どう?」と私の研究についてお尋ねにられました。

人間の心の動きが外国語教育学習に果たす役割は、長年の研究が進められてきたことではありますが、羽鳥先生のご研究は日本の英語教育が直面する問題を心理学的な立場から追求し、あわせて、その成果の実際の場面への応用を独特の視点から提示され、外国語教育の発展を試みられたことです。先生

のご専門の「心理言語学と英語教育」のお話をお聴きし、まだ駆け出しの私には大変魅力的に感じられたことが思い出されます。

羽鳥先生のご研究またご遺志を継承し、今後とも LET のさらなる発展に尽力する所存です。先生が天上より私たちの歩みを見守ってくださっていることを願いながら、精進を重ねてまいります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 全国研究大会を終えて

大会実行委員長 西尾 由里（名城大学）

外国語教育メディア学会（LET）第63回（2024）年次研究大会（The 63rd Annual Conference of the Japan Association for Language Education & Technology, 2024）は、2024年8月6日から8日にかけて開催されました。大会テーマは「令和の教育改革 —未来の外国語教育をデザインする—」（Educational Reform in the Reiwa Era – Designing the Foreign Language Education of the Future）でした。

名古屋では体温を超えるような猛暑の中、多くの皆様にご参加いただき、活発な意見交換と情報共有が行われましたこと、心より感謝申し上げます。また、広々とした美しいキャンパスと最新のICT環境を整えてくださった名古屋学院大学の皆様にも、深く御礼申し上げます。

今回の研究大会では、ICT、デジタル、AI、オープンサイエンスといったトピックを通して、私たちの教育現場が「教師+学習者」中心から「教師+学習者+デジタル変革（DX）」という新しい構図へと移行している現実を実感できました。ユヴァル・ノア・ハラリ著『NEXUS 情報の人類史』（2024）では、AIやネットワーク技術の進展に対する警鐘が鳴らされていますが、まさに本大会は、私たちがこれらと「賢明に共存」しながら、教育を再構築していく必要性を考える機会となったのではないのでしょうか。

今回の基調講演では、以下の3名の先生方より非常に示唆に富むお話をいただきました。文部科学省初等中等教育局の武藤久慶氏は、少子化と国際化の進行を背景に、学校教育の抜本的改革と、デジタルAIを使いこなす人材の育成、さらには多様な価値観と不確実な世界を生き抜く力の涵養の必要性を強調されました。情報科学をご専門とされる乾健太郎氏（MBZUAI・東北大学・理化学研究所）は、AIの本質について分かりやすくご説明くださり、AIを活用したライティングの評価やフィードバック生成の可能性と課題を明示されました。第二言語習得がご専門のJulie Norton氏（University of Leicester）は、多文化的な背景をもつ学習者への教材設計において、文化的なタブーへの配慮の必要性を論じられました。このことから、日本の教材に潜むステレオタイプの価値観の再考の重要性を考えていくきっかけとなったのではないかと思います。これらの講演は、私たちに「一歩先」どころか「遙か先を見据える」視座を与えてくださいました。

ワークショップ・シンポジウム・研究発表も多様でした。8月6日に実施された13講座の多彩なワークショップには、137名もの方々にご参加いただき、関心の高さがうかがえました。講師の皆様のご準備と、参加者の皆様の積極的なご参加に、深く感謝申し上げます。さらに、公募シンポジウム（4件）では、デジタル教科書、英語の歌の活用、小中高大を繋ぐ発音ガイドライン、態度形成など、多様なテーマについて活発な議論が交わされました。その他にも、発表・実践報告（33件）、ポスター発表（4件）、賛助会員プレゼンテーション（9件）など、実に多彩な発表がなされ、参加者同士の貴重なフィードバック交換が行われました。

このように本大会が成功を収めることができたのは、ご参加くださった皆様のお力添え、そしてLET中部支部事務長の工藤泰三先生をはじめとする多くの実行委員の皆様のご尽力のおかげです。改めて深く感謝申し上げます。

なお、本大会は、今後の国際大会開催を視野に入れ、「全国大会」ではなく「年次大会（Annual Conference）」

として位置づけ、すべてのウェブサイトおよびプログラムに英語表記を併記いたしました。この準備にあたっては、日本語・英語の校正を含め、多くの関係者の皆様にご協力いただきましたことにも、心より感謝申し上げます。

最後になりますが、LET は今後も、先進的なテクノロジーを教育に積極的に取り入れ、その活用方法を研究していくことを目指します。しかし、その中心には常に「人」がいます。私たち教員、教育関係者、そして協力企業の皆様とともに、「人間中心の教育」の未来を築いていきたいと願っております。本大会での出会いや学びが、今後の皆様の教育実践と研究に活かされることを心より願っております。今後ともLET へのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2024 年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿

対象業績（学術賞）：『国語教育と英語教育をつなぐ：「連携」の歴史、方法、実践』

受賞者：柁木貴之（LET 関東支部、北海学園大学）

対象業績（論文賞）：The Contribution of Phonological and Prosodic Awareness to L2 Reading Comprehension among Japanese EFL Learners（Language Education & Technology, 60, 2023. 掲載論文）

受賞者：佐々木 大和（LET 関東支部、帝京大学）

学術賞を受賞して

柁木貴之（LET 関東支部、北海学園大学）

この度は名誉ある LET 学術賞を受賞でき、大変光栄に思います。私を推薦して下さった先生方に厚くお礼申し上げます。受賞業績となった『国語教育と英語教育をつなぐ：「連携」の歴史、方法、実践』（東京大学出版会、2023 年）は私が東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文をもとにしています。指導教員である斎藤兆史先生に感謝の言葉をお伝えしたいです。そして、賞状を授与して下さった森田彰会長には、早稲田大学に在学した 2006 年ころからずっとご指導をいただいております。森田先生に心より感謝いたします。

本書のテーマは「英語教育と国語教育の連携」です。「連携」というと何か難しいように思えますが、外国語学習の土台となるのは、母語の力であることは多くの先生方が経験してきたことではないかと思えます。私は別々に存在する外国語教育と国語教育を結びつけることができれば、両者に相乗効果が生まれ、言語教育全体として大きな効果をあげることができるのではないかと考えました。しかし、このテーマについて論じるのは容易ではありません。なぜなら、外国語教育と国語教育の両方に対する知見が必要になるからです。そこで、私は国語と英語の両方の教員を経験しようと思えました。早稲田大学で英語の免許を、東京大学大学院で国語の免許を取得し、高校英語については 2 年間、高校国語については 8 年間、教壇に立ちました。

高校国語の 8 年間は大学英語教員を務めた時間と重なります。その 8 年間は、木曜の 1・2 限は大学で英語を教えた後、高校に移動して、5・6 限は古典を教えるというような日々でした。非常勤講師の業務に追われ、博士論文の完成が遅れていたある日、森田先生と早稲田でお会いした際、「現状に不満があっても、常に現状がベストだと思いなさい」というご助言をいただきました。今でも心に残っています。

このような日々を経て書き上げたのが、私の博士論文です。3 年くら



名古屋のホテルで撮った賞状

いで書くと意気込んで進学した博士課程ですが、気づけば学位を得るまでに10年の歳月が流れていました。つらいときもありましたが、先生方と先輩・後輩に恵まれ、充実した時間を過ごすことができました。さらに出版社にも恵まれて、こうして本書を刊行することができました。多くの方に手に取っていただけたら嬉しいです。

本学会は外国語教育について研究する学会ですが、教育とりわけ言語教育はその国の未来を作る営みです。時代の変化を踏まえ、新しい言葉の学びを創出する必要があります。本書が今後の言語教育の在り方を考える一助となれば幸いです。

### 論文賞を受賞して

佐々木 大和 (LET 関東支部、帝京大学)

この度は、名誉ある LET 論文賞を賜り、心より光栄に存じます。本賞の受賞は、論文の執筆に際しご助言をくださった指導教員の筑波大学・土方裕子先生、ならびに実験実施の際に貴重なアドバイスをくださった前指導教員の卯城祐司先生のお力添えによるものです。

また、本論文の査読を担当してくださった先生方、機関誌編集委員会の先生方、さらには論文の推薦にご尽力くださった先生方をはじめ、多くの方々の支えがあったからこそ、このような賞を頂戴することができました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

本論文は、私が博士前期課程 2 年生のときに実施した実験結果をまとめたものです。もともと音とリーディングの関係に関心を持っていた私は、L1 研究や EFL 研究において長年注目されてきた Phonological Awareness (音韻認識)に加えて、Prosodic Awareness という能力の存在に着目しました。当時、EFL 研究における Prosodic Awareness の研究はまだ十分に進んでおらず、その重要性を明らかにすることが本研究の出発点となりました。

実験を行った当時は、関連する先行研究も限られていましたが、近年ではレビュー論文やメタ分析が発表されるなど、徐々に関心が高まっていることを実感しています。そのような状況の中で本賞を受賞できたことは、大変光栄であり、今後の研究への大きな励みとなりました。

また、本賞を受賞した際は、博士論文の予備審査論文を執筆している最中でもありました。博士論文の執筆を進める中で、自身の研究に自信が持てず、思うように筆が進まないこともあり、精神的に苦しい時期を過ごしていました。しかし、論文賞の受賞は大きな励みとなり、自身の研究に対する確信を取り戻すきっかけとなりました。博士論文を執筆する上での精神的な支えとなり、改めて前向きに取り組む力を与えてくれたように感じています。

本賞の受賞を機に、これまでの研究成果をさらに発展させ、EFL 学習者のリーディングにおける Prosodic Awareness の役割をより深く探求していきたいと考えております。今後も研究に真摯に取り組み、得られた知見を教育現場や実践に還元できるよう努めてまいります。最後に、ご指導・ご支援くださったすべての方々に、改めて深く感謝申し上げます。



佐々木氏と森田 LET 会長とともに

## 第 63 回（2024 年度）年次研究大会報告

外国語教育メディア学会（LET）第 63 回（2024）年次研究大会は、2024 年 8 月 6 日から 8 日まで名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり（愛知県名古屋市）にて開催されました。

### 【開催概要】

開 催 日：2024 年 8 月 6 日（火）～8 日（木）  
会 場：名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり  
（愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1-25）  
参 加 者 数：279 名  
主 催：外国語教育メディア学会（LET）  
会 長：森田 彰（早稲田大学）  
大会実行委員長：西尾 由里（名城大学）  
後 援：文部科学省・愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会  
実 施 内 容：下記の通り

### 基調講演 1：

「なぜ令和の教育改革なのか、GIGA スクール構想なのか？ ～英語教育関係者に知って欲しい教育改革の背景と実践」

武藤 久慶（文部科学省初等中等教育局 教育課程課長）

### 基調講演 2：

“Research into Materials Development for Language Teaching”

Julie Norton (University of Leicester)

### 基調講演 3：

「進化する AI はライティング教育に何をもたらすか」

乾 健太郎（MBZUAI・東北大学・理化学研究所）

ワークショップ（13 講座、参加者数 137 名）

公募シンポジウム（4 件）

研究発表・実践報告（33 件）

ポスター発表（4 件）

賛助会員プレゼンテーション（9 件）

8月6日(火): 第1日

---

ワークショップ

---

**Room 1**

(13:30-14:50)

Praat (プラート) 入門

服部 範子 (三重大大学)

**Room 2**

(13:30-14:50)

一般化線形混合モデル (GLMM) 入門

小島 ますみ (名古屋大学)

(15:05-16:25)

外国語教育研究のためのオープンサイエンス

石井 雄隆 (千葉大学・理化学研究所)

(17:00-18:30)

外国語教育研究者のためのオープンサイエンス入門  
—R Markdown を用いた実践編—

寺井 雅人 (愛知工科大学)

**Room 3**

(13:30-14:50)

学習者と協働してつくり上げる授業の実践

—主体性を引き出す工夫と仕掛けづくり—

野村 高志 (早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校)

(15:05-16:25)

小学校英語教育における音声指導の効果的な進め方  
—2024年度の教科書改訂を踏まえて—

箱崎 雄子 (大阪教育大学)

(17:00-18:30)

手話と手話教育メディア研究のミニ体験

田中 省作 (立命館大学)

長谷川 由美 (近畿大学)

本田 久平 (大分工業高等専門学校)

**Room 4**

(13:30-14:50)

教室内外での ICT 活用による英語学習の促進

田淵 香奈子 (大阪府立堺西高等学校)

(15:05-16:25)

デモ授業で理解するタスク・ベースの言語指導法  
—超入門編—

小林 真実 (名古屋大学)

(17:00-18:30)

共時的コンピュータ媒介コミュニケーション  
(SCMC) の英語力への影響

鈴木 智久 (静岡県立静岡城北高等学校)

中川 右也 (三重大大学)

大瀧 綾乃 (静岡大学)

白畑 知彦 (静岡大学)

**Room 5**

(13:30-14:50)

eBooks and Early Language Learning

Sun He (National Institute of Education, Nanyang  
Technological University)

(15:05-16:25)

授業評価アンケートのテキストマイニング

小林 雄一郎 (日本大学)

(17:00-18:30)

パフォーマンス評価のための生成 AI 活用入門

李 在鎬 (早稲田大学)

8月7日(水): 第2日

**開会行事**

会長挨拶: 森田 彰 (早稲田大学)  
 実行委員長挨拶: 西尾 由里 (名城大学)  
 会場校挨拶: 赤楚 治之 (名古屋学院大学 学長)  
 総会  
 学会賞授賞式

**基調講演 1**

なぜ令和の教育改革なのか、GIGA スクール構想  
 なのか? ~英語教育関係者に知って欲しい教育  
 改革の背景と実践

武藤 久慶

(文部科学省初等中等教育局 教育課程課長)

ますます進む少子化とさらなる国際化の時代を  
 迎え、学校教育には抜本的な改革が求められてい  
 る。変化が激しく不確実な社会で、子ども達が豊  
 かな人生を切り開いていくためには、どのような  
 教育が必要なのだろうか。

これからの社会では、豊富な知識やそれらを使  
 いこなす技能だけではなく、多角的観点から物事  
 を捉える柔軟性や、異なる価値観を受け入れ、他  
 者を尊重すると同時に、自分の意見もはっきりと  
 表現する多文化共生力が不可欠となる。一方で、  
 クラスでは、基本的なコミュニケーションに問題  
 を抱える子どもが増え、不登校や暴力行動なども  
 増加している。教員の負担は増すばかりである。  
 児童・生徒の一人一人に向き合い、質の高い教育  
 を行うためには、学校も教員も、利用可能なデジ  
 タル・ツールをあらゆる方法で活用していかなけ  
 ればならない。

「耳に心地のよい 1.25 倍速」で行われた講演で  
 は、デジタル機器を活用した様々な教育実践紹介  
 に加え、外国語教育改革への提言も行われた。

【報告: 石川有香 (名古屋工業大学)】

**基調講演 2**

Research into Materials Development for Language  
 Teaching

Julie Norton (University of Leicester)

Many participants gathered at the lecture room for  
 Keynote Speech 2 by Dr. Julie Norton. She explained  
 the important factors for teachers to develop teaching  
 materials, using many examples and quizzes. The  
 participants enjoyed a quiz to determine the level of  
 vocabulary and a quiz to consider PARSNIP, which is  
 an acronym to stand for taboo elements of teaching  
 materials. Finally, she mentioned that various versions  
 of Headway, a well-known textbook, have been  
 developed according to country, region, religion, culture,  
 and other factors, and pointed out the importance of  
 developing one that addresses further diversity in the  
 future. The participants were highly interested in the  
 topic, and during the Q&A session, the references were  
 presented again and there was a request for her to send  
 the PowerPoint presentation file.

【報告: 鈴木 薫 (名古屋学芸大学)】

**公募シンポジウム****Room 1**

小学校外国語教育における音声指導と評価: デジ  
 タル教科書とロイロノートを活用して

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

西尾 由里 (名城大学)

柳 善和 (名古屋学院大学)

小学校外国語教育におけるロイロノートを用い  
 た音声指導の実践事例が紹介され、児童のリズム  
 やイントネーションの変化、日本語と英語の異な  
 るメカニズムが発音に与える影響が報告された。  
 また、過去から現在に至る音声指導の進化を通じ、  
 児童が自身の発音を意識しながら効果的に練習で

きる方法が紹介された。質疑応答では、小学校のデジタル化推進に慎重な意見もあった。参加者は約 60 名であった。

【報告：中山 麻美（岐阜医療科学大学）】

## Room 2

英語歌利用実践における新たな工夫と課題

中田 ひとみ（獨協大学）

朝熊 悠（関東学院大学）

湯舟 英一（東洋大学）

本公募シンポジウムでは、関東支部の英語歌利用研究部会のメンバーが、英語歌を用いた授業実践について新たな視点から議論を行った。中田氏からは発音の理解・スキル向上による実践、朝熊氏からは教科書を用いた発音・文法指導、湯舟氏からは YouTube 動画作成と教育への応用について報告がなされた。40 名余りの参加があった会場からは、英語歌使用の目的・効果についての質問等、活発な質疑が交わされ、大盛況に終わった。

【報告：堀内 ちとせ（藤田医科大学）】

## 研究発表・実践報告

### Room 1

Transforming Language Learning with AI: Boosting Writing and Speaking Skills

OBARI, Hiroyuki (Globiz Professional University)

In this presentation, the author shared the results of a case study that introduced high-quality interactions between Japanese students and native English speakers at the university level and evaluated the outcomes using AI tools. As a result, the students demonstrated a positive attitude towards the integration of AI into their English writing and improved their English-speaking skills. Approximately 30 participants attended this session, and questions from participants ranged from pedagogy to the content of the case study.

【報告：小田 理代（麗澤大学）】

Enhancing speaking and diverse skills with ChatGPT-Assisted class

LEE, Saeun

(Prefectural University of Kumamoto)

In this presentation, the author presented a case study of AI-enhanced English teaching aimed at improving English speaking and other diverse skills. During the class, Japanese university students created, evaluated, and presented an English conversation between two foreigners from different cultures using ChatGPT. Approximately 30 participants attended this session, and questions from the participants included the reason for using ChatGPT and how to use ChatGPT effectively.

【報告：小田 理代（麗澤大学）】

### Room 2

メタ認知能力の育成を目的とした学習ポートフォリオの活用

柳谷 孝一（神奈川県立上溝南高等学校）

本研究は、高校の英語学習における自律的な学習能力の育成方法を探るため、「自律した学習者は、高いメタ認知能力を持っている」、「学習ポートフォリオは、メタ認知能力を高める」という先行研究の知見をベースに、事前と事後で質問紙を用いてその効果を検証した内容である。25 名の参加者から、主体的態度の評価の有無や他の教員からの協力体制について質問があった。

【報告：大津 敦史（福岡大学）】

「話すこと [やり取り]」の向上をめざした実践：対話型鑑賞を用いて

出尾 美由紀（大阪府立港南造形高等学校）

本研究は、高校生英語学習者の対話能力の向上を図った授業実践である。美術作品を題材に、ペアで、1) 何が描かれているか、2) どうしてそう思うのか、3) 他に何が描かれているか、について対話をさせ、その様子を録画して、事前・事後で比較

し、発話量の増加と正確性の向上を検証した内容である。30名の参加者から、日本語での実施やテストの評価基準などについて質問があった。

【報告：大津 敦史（福岡大学）】

心豊かな IT ユーザーとしての成長を促す授業

河内山 晶子（明星大学）

本研究は、心を豊かにする名作映画を視聴し、感想を述べあい、印象に残ったシーンをアクト・アウトし、次に時間的・レベル的制約のない ChatGPT との対話を用いて名画から誘発されたテーマに関するプレゼンテーションを準備、Padlet 録画してアップした。自己の客観視と気づきを通し、更なる改善が可能となった。15名の参加者から、学習者の成長と AI との関連について質問があった。

【報告：大津 敦史（福岡大学）】

### Room 3

興味ベース学習のためのミニプロジェクトの実施と評価

松井 久恵（プリンストン大学）

アメリカの私立大学の日本語初中級コースで実施した興味ベース学習のミニプロジェクトの実践と結果について報告がなされた。学生は毎週交互に興味がある活動と 苦手分野を克服するための活動を行った。その活動内容を Google Forms を使い提出し、Padlet で教材やツールを学生は共有する。学期終了後に行ったアンケート結果からは、学習者の日本語の成績（レベル）問わず、インプット活動が多く、アウトプットに必要な「話す」や「書く」能力を伸ばす活動は少なかったことが分かった。学生のモチベーションの向上や自律学習の促進に貢献したものの、メインのカリキュラムに興味ベースの学習を持ち込むのは難しいという考えが共有された。質問として、学習者のレベルが異なるとどれだけ結果が変化するかどうか見解を求めたところ、レベルに関わらずプレゼンテ-

ションは苦手だということが分かり、今後改善する必要があると答えられた。10人ほどの参加者が視聴された。

【報告：鬼頭 和也（国際基督教大学）】

オンライン会議システムとアプリ併用授業による授業双方向と学習動議促進の試み

戸田 博之（早稲田大学）

コロナ禍後でもオンライン時の環境を併用した試みの実践報告である。その成果を学生からのフィードバックから読み取り、検証し、改善に向けた展望と課題について発表がなされた。授業の中での活動として、様々なツールを活用した例を紹介された。教師の視点からは自動採点を行うことで労力と時間の効率化が進み、学生としてはツールの使用方法を求める内容が多かったものの、他の学習活動にも応用できそうだというコメントも学生からあったことから併用に成功したと結論付けられた。ゲーム性を取り込むことで更に授業参加が見込めるのではないかと締めくくられた。質問には、Kahoot の有料アカウントの活用例について質問があり、発表者はフリーの範囲でも十分である点や、必要に応じて課金をしつつも、基本は無料のサービス内容を活用しているとの回答があった。参加人数 10人程度。

【報告：鬼頭 和也（国際基督教大学）】

### Room 4

英語教職課程におけるオーセンティックな言語材料の取り扱い：データベース作成と模擬授業での使用を通して

鈴木 健太郎（北海道教育大学）

発表者が担当する「中等英語科教育法」で作成したデータベースの実践報告。CEFR-J Grammar Profile を基準に、受講生に映画、歌詞、名言、ことわざなどを共同編集可能な Excel ファイルに収集させ、授業での共有を行った。質疑では他大学や中高での利用可能性があったが、著作権上の理由

で困難かもしれないという回答があった。約 20 名の参加があった。

【報告：神谷 健一（大阪工業大学）】

映像メディアを活用した教師主導データ駆動型学習の実践—文法・語彙・語用論的知識指導の融合を目指して—

大木 七帆（北海道武蔵女子短期大学）

発表者が担当する英文学科所属の学生に対する教師主導 DDL の事例紹介。教師は PlayPhrase.me を利用して素材を抽出し、受講生は YouGlish、TED Corpus Search Engine などを利用して提出物を作成した。学習者は自身の知識・能力の向上に有益だったか等の調査が行われ、その結果が報告された。質疑では具体的な課題内容や Web アプリ等の使い方などが寄せられた。約 25 名の参加があった。

【報告：神谷 健一（大阪工業大学）】

AI 英語学習アプリで何を学べるか？—大学生英語学習者による発音判定・問題生成・作文添削の有効性評価を中心として—

田中 洋也（北海学園大学）

山本 修久（株式会社ポリグロッツ）

本発表では企業研修に注力する株式会社ポリグロッツが開発したアプリ「レシピー」を主に大学授業の内外で利用した実践事例報告が行われた。当該アプリでは学習課題作成・提出課題評価において AI を利用しており教員は省力化できる。他方、学習者の自律学習の必要性も求められるが、AI アプリだけでなく教員介在の必要性についても議論がなされた。約 25 名の参加があった。

【報告：神谷 健一（大阪工業大学）】

## Room 5

Changes in EFL Learners' Comprehension, Note-taking Ability, and Selfperceived Difficulty when Listening to Lectures

SAKURAI, Shizuka (Tohoku University)

SPRING, Ryan (Tohoku University)

本発表では、大学生を対象にしたリスニングクラスにおいて、ノート・テイキング力の向上を目指した研究について発表がなされた。1 セメスターをとおした研究の結果、トレーニングをとおしてノート・テイキング力が向上し、その結果としてリスニング力も向上することが示された。発表会場には 20 名程度が参加し、ノート・テイキング指導の方法とその効果について活発な議論が行われた。

【報告：鬼田 崇作（同志社大学）】

Pre-Service Teachers' Preparation for Task-Based Grammar Activities: How can ChatGPT assist them?

HOSOKAWA, Hirofumi

(Fukuoka Jo Gakuin University)

本発表では、大学生を対象にした英語科教育法の授業において、ChatGPT を利用して模擬授業の準備を行うことの効果について発表がなされた。学生は文法活動のためのモデル・ダイアログの作成に困難を感じていたが、ChatGPT を援用することの効果を示された。発表会場には 20 名程度が参加し、教員養成課程における生成 AI の利用方法や効果について活発な議論が行われた。

【報告：鬼田 崇作（同志社大学）】

英語学習の楽しさと退屈さが英語習熟度にもたらす影響

森田 光宏（広島市立大学）

本発表では、先行研究で使用されている英語学習についての楽しさ（enjoyment）と退屈さ（boredom）を測定する質問紙について、日本人英語学習者の大学生を対象とした妥当性検証と、その 2 因子と英語習熟度との関連についての調査結果が報告された。確認的因子分析の結果、先行研究の結果とほぼ整合的な結果が得られ、また、質問項目を整理した新たな分析結果も示された。さ

らに、楽しさが英語習熟度とより関連する分析結果が示された。発表会場には 30 名程度が参加し、質問紙の内容と英語力との関係について活発な議論が行われた。

【報告：鬼田 崇作（同志社大学）】

### Room 6

日本語学習者の作成短文の特徴とその処理を考える

鈴木 美加（東京外国語大学）

日本語教育における文型（構文）学習および支援に関する課題について触れた上で、上級学習者の中級文型復習の授業において行った作成短文課題と学習者作成短文の特徴について、取得したデータを分析・検討する研究発表であった。発表の後で、参加者 1 名から、データ処理レベルに関しての質問があった。参加者 7 名。

【報告：宮内 なぎさ（宮崎公立大学）】

日米英の苦情対応に関する国際比較 — ロールプレイとインタビューの分析 —

岩井 千春（大阪公立大学）

岩根 久（大阪大学）

訪日外国人客数の回復に伴い今後は外国人客接遇時に英語で苦情対応をする機会が増加することが予測される。苦情対応法についての学術的研究は発表者らの研究以外は行われていない。本研究では先行研究を発展させて、日・米・英 3 か国の人々についてロールプレイ時の言葉のやり取りを分析した。発表後、データ分析手法に関して複数の質問が出た。参加者 10 名。

【報告：宮内 なぎさ（宮崎公立大学）】

Perl で作成した穴埋めテストによる英語不変化詞の認知言語学的習得法

横田 生治（グレッグ外語専門学校）

非英語話者が英語の不変化詞を習得するためには認知言語学（認知文法）的アプローチが必要で、

辞書やコーパス、検索エンジン、データ駆動型学習などだけでは不十分である。よって本発表では、発表者が作成した穴埋めテストを紹介した上で、今後の使用法や課題についても言及した。発表後に、内容に関する質問やコメントがあった。参加者 6 名。

【報告：宮内 なぎさ（宮崎公立大学）】

### 賛助会員プレゼンテーション

#### Room 1

授業で使える英語 e ラーニング教材「ぎゅっと e」

北辰映電株式会社

#### Room 2

ライティング指導ソフト「Criterion」のご紹介

ETS Japan

BYOD 対応語学学習支援システム『CaLabo MX』

新機能のご紹介

チエル株式会社

## 8 月 8 日（木）：第 3 日

### 基調講演 3

進化する AI はライティング教育に何をもたらすか

乾 健太郎

（MBZUAI・東北大学・理化学研究所）

大規模言語モデルの発展・大規模化によって、言語処理技術は飛躍的に伸び、AI の知的情報処理能力は格段に向上した。この進化する AI は、インターネットやスマートフォンと同様に、社会変革を引き起こす可能性を秘めた革命的な技術だといわれている。本講演では、自然言語処理の専門家である乾氏が、その AI 技術を応用し教育分野の研

究者達と連携したとき、外国語教育の領域において、特にライティング評価や教育的なフィードバック生成についてどこまで AI を用いて達成できるのか、またどこに困難が残っているのかを研究事例を挙げて、紹介された。乾氏によると、現段階で研究リソースとしての言語データは蓄積されているが、学びを支援する仕組みをどのようにデザインするかという点において、実際の学習者への影響を調べるなど、今後も地道な実験の積み重ねが必要だとの説明があった。また、その研究のなかで、2021年に予備校と共同開発した「自動採点機能付き問題集」など興味深い成果の紹介もあった。講演後、フロアからは、今後 AI が人工的な言語を拾ってモデルとするような、いわゆる「データ汚染」についての質問や、現在の AI 研究の進展を確認する質問があった。

【報告：松井 かおり（大同大学）】

## 公募シンポジウム

---

### Room 1

小・中・高・大へ接続する包括的発音に関する音声ガイドラインに向けての提案

西尾 由里（名城大学）

巽 徹（岐阜大学）

ジェームス・ロジャース（名城大学）

本発表ではコミュニケーションを支える基本となる発音について、小・中・高・大へと繋ぐガイドラインを作成する必要性が指摘された。学習指導要領の音声指導に関する記述と、教科書教材での発音項目の扱われ方についての実情報告と、小学生および大学生が苦手とする音素（聞き取り・発音）の調査報告がされた。また音声トレーニングのためのフリー・アプリの説明と、発音時の舌の動きを画像表示するオンライン教材の紹介がされた。約 50 名の参加者があり、会場からは目指す発音のモデルはあるかなどの質問がされた。

【報告：松原 緑（名古屋大学）】

### Room 2

Bridging Theory and Practice: Strategies for Fostering Communicative Behaviors in Japanese EFL Contexts

SATO, Rintaro (Nara University of Education)

KOGA, Tsutomu (Ryukoku University)

KONNO, Katsuyuki (Ryukoku University)

IZUMITANI, Tadashi (Kindai University High School)

The presentation highlighted the importance of Willingness to Communicate (WTC) in the Japanese learning environment. It referred to Devi & Ryan (2002) to discuss intrinsic and extrinsic motivation and explained the link between self-determination theory and WTC. Sato (2023) was cited to show how lower-level speaker perspective, sense of security, self-confidence, and sense of duty influence WTC.

The discussion also drew on Izumitani (2020/2024), suggesting that PPP-based lessons could potentially enhance WTC and recommending the Revised PPP (RPPP) approach for Japanese learners. RPPP emphasizes “learning to use” rather than “learning by using,” with a focus on the importance of thought-engaged practice.

During the Q&A, questions addressed the impact of pair and group work on WTC, the challenge of measuring psychological factors, and differences between EFL and ESL environments. The presenters stressed the need for sufficient practice and scaffolding and discussed the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s recommendations for designing goal-aligned activities.

The number of attendees was around 45.

【報告：中川 右也（三重大学）】

## 研究発表・実践報告

---

### Room 1

プロジェクト発信型英語における発音改善ソフト

## 「ELSA Speak」導入の成果と学生の意識調査

坂上 潤 (立命館大学)  
 近藤 雪絵 (立命館大学)  
 木村 修平 (立命館大学)

Project-based English Program (PEP)という学生の興味関心に基づいた BYOD & ICT を利用したプロジェクトに関する実践報告。音声評価ソフト ELSA Speak を自習課題に利用。TOEIC スコア向上との相関は無かった。学習時間と ELSA スコアの伸びには 0.46 の相関がみられた。

スコア向上のプリポストテストでポストテストの人数が2割くらいになっており、そこでアンケートに解答した学生はモチベーションのある学生なので、実際の意見とは離れている可能性があるのではないかと、等の議論があった。参加人数は16名であった。

【報告：湯舟 英一 (東洋大学)】

## 発音学習サイトの開発と導入

石井 朱美 (芝浦工業大学)

発音学習サイトの開発と実践例の発表。コンテンツは音声合成の「音読さん」を利用。授業に対応したコンテンツを展開。洋楽の歌詞サイトも含まれており、利用者の評価も高かった。授業では発音確認しながら語彙導入に利用している。

現在歌詞サイトで何曲くらい上がっているか、学生の具体的な利用の仕方はどうか、合成音声に「音読さん」を使用した理由は、等の質問があった。参加人数は15名。

【報告：湯舟 英一 (東洋大学)】

## 学習者の能力等に応じた SSML による TTS 合成音声の最適化

東淳一

(Society for Advanced Global Education, LLC)

クラウド型 TTS 音声合成サービスを使い外国語、第二言語としての英語の音声教材を作成する際の問題点の提示。Google Cloud Platform の音声を利用。

<voice>タグを使い複数人の会話音声の一つのファイルで管理できる利点がある。Speech Synthesis Mark-up Language (SSML) の使い方の基本についても説明。

代表的な質問に、音連結などのアジャストは可能か、公的機関や有名企業での利用割合はどのくらいか、航空会社や鉄道などの公共交通機関での利用が増えているのはなぜか、等があった。参加人数は12名。

【報告：湯舟 英一 (東洋大学)】

## Room 2

Whisper を利用したリアルタイム音声認識プログラムの開発

後藤 一章 (摂南大学)

Whisper.cpp を利用して開発した音声のリアルタイム認識プログラムについての発表であった。リアルタイムでの文字おこしを可能にするため、ニューラルネットワークモデルを採用し、その正確さを実際に聴衆の前で披露した。参加者は14名であった。質疑応答では、「ノイズについて」や「オリジナルの Whisper との精度比較」など様々な質問が出され、活発なやり取りがなされた。

【報告：新田 よしみ (福岡大学)】

## 学習者用図書から一般書へ：医学生のための継続的リーディング

西川 純恵 (日本医科大学)

オンライン多読システム Xreading を用いた授業外リーディングを医学部1年生に通年で課した報告がなされた。1学期は全員 Graded Readers のオンライン版 (Xreading) に、2・3学期は Graded Readers もしくは Diagnosis: Solving the most baffling medical mysteries という一般書のどちらかを読むように指導した結果、学生にどのような傾向が見られたか詳細な説明があった。3名の出席者からは、「Xreading のレベル」や「学生が好むタイトル」など様々な質問がだされた。

【報告：新田 よしみ（福岡大学）】

英語聴解力養成のための社会科学・人文科学分野  
CALL 教材の開発

与那覇 信恵（千葉大学）

土肥 充（國學院大學）

阿佐 宏一郎（東洋大学）

セーラ モリカワ（千葉大学）

竹蓋 順子（千葉大学）

文系学生を対象とした Listening 教材を開発するにあたり、どのような点を考慮して動画素材を作成したのか、どのようなステップを踏んでコース教材を準備していったのかなどについての報告であった。9名の聴衆からは、「授業内での教材使用時間」や「音声変化の教授方法」「TOEIC の得点変化」などの質問が出され、活発なやり取りが交わされた。

【報告：新田 よしみ（福岡大学）】

### Room 3

ChatGPT とスマートフォンを用いたスピーキング  
学習の効果：相互採点による協同学習と自立支援  
学習

築地原 尚美（滋賀県立大学・龍谷大学）

本発表では、大学生を対象に、グループ討議と MT 活用を通じて作成したスピーチ原稿の発表の録音をクラスで共有し、相互評価するとともに、ChatGPT で語彙数などを分析・評価させた授業実践の報告である。30名の参加者がおり、質疑応答では、課題の提示方法や、学生どうしのフィードバックの質のコントロールについての質問があった。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

Google サイト／Google フォームを活用した匿名  
性の高いリーディング・ライティング活動

真島 由朱（大阪府立桜塚高等学校）

本発表では、「自己開示・多様性」テーマに、高

校生が自分についての短いライティングをし、個人が特定できないように教員がコントロールした状態で互いに読んでコメントさせる授業実践の報告が行われた。35名の参加者がおり、質疑応答では、教員の負担、生徒のツールの活用力や使用制限、個人的な内容の扱いなどについて質問が上がった。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

大学生の英語の機械翻訳（MT）の使用に関する  
調査研究

稲葉 みどり（愛知教育大学）

本発表は、教員養成系の大学生の MT の使用状況を行い、学生は工夫をしながらリーディングでは主に単語レベル、ライティングでは単語および文レベルで使用していることが報告された。43名の参加者がおり、質疑応答では、授業内の学習活動での MT 使用や、学生どうしのストラトジー共有、習熟度との関係などについての質問があった。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

### Room 4

小学校英語教育における発音指導の事例

河内山 真理（関西国際大学）

有本 純（関西国際大学）

小学校の英語授業における発音指導についての調査報告であった。教材の分析、授業の観察、指導者に対するアンケートを調査対象とした。教科書のほとんどの活動が聞かせて繰り返させており、指導者が適切に発音できていない場合があり、発音指導を ALT に委ねている可能性も示された。参加者から発表者が教科書を開発する提案があった。参加者は 17 名。

【報告：今村 梨沙（関西大学）】

英語教員の動機づけ方略使用に対して「有効性」、「コスト」、「授業との親和性」の認識が与える影響について

川光 大介 (大阪公立大学工業高等専門学校)

竹内 理 (関西大学)

英語教員の動機づけ方略 (MS) に対する有効性、コスト、授業との親和性の認識がどの程度彼らの MS 使用に影響を与えるか高専教員を対象とした量的分析に基づく調査報告がなされた。その結果、コストと親和性の 1 因子「自律のサポート」のみに相関があったため、「好み」などの別の要因が複雑に関与している可能性が示唆された。参加者は 33 名。

【報告：今村 梨沙 (関西大学)】

英語の音変化はリスニング技能とシャドーイング技能とどのように関係しているか

山内 豊 (創価大学)

峯松 信明 (東京大学)

西川 恵 (東海大学)

日本人英語学習者の英語の音変化を認識する技能がリスニング技能とシャドーイング技能といかに関係しているかについての調査報告であった。音変化の認識はリスニング技能だけでなく、シャドーイング課題を達成することとの関係が大きいことが示された。質疑応答では、シャドーイングを 5 回させた理由などが議論された。参加者は 34 名。

【報告：今村 梨沙 (関西大学)】

### Room 5

エッセイライティングスコアに影響を及ぼす結束性指標の検証

久保 佑輔 (福岡大学)

本発表では、結束性指標がエッセイライティングスコアに与える影響について、ICNALE のエッセイデータを用いて検討したものである。結果として、質の高い、まとまりのある文章と評価されるためには、接続詞や語彙的重複が重要であることが示された。分析に影響を与え得る要因の検討や教育への示唆などに関する質疑が行われた。参

加人数 15 名。

【報告：森田 光宏 (広島市立大学)】

日本語母語中学生の英語文法形態素の理解、産出、習得に関する調査研究：3 人称単数現在形 -s、複数形 -s、所有格 -'s に着目して

奥田 由美子 (桜花学園大学)

杉浦 正利 (名古屋大学)

本発表は、3 つの屈折形態素が中学生にどのように習得されているのかを産出課題と理解課題を用いて検討したものである。結果として、学年や課題の種類に加えて、それぞれの形態素に特異な要因が習得に影響を与えていることが示された。課題の設定や測定する知識の定義などについて活発な質疑が行われた。参加人数 26 名。

【報告：森田 光宏 (広島市立大学)】

大学生英語学習者における自己決定理論の二重過程モデルの検討

染谷 藤重 (京都教育大学)

本発表は、自己決定理論の二重過程モデルを実証的に検討したものである。結果として、明るい側面と暗い側面の 2 つの経路があることが示された。また、自律性支援指導を経て心理的欲求級が充足されることで、学生が非エンゲージメントに陥ることを軽減できる可能性が示された。得られたモデルの適切さや結果の教育面への応用についての質疑が行われた。参加人数 15 名。

【報告：森田 光宏 (広島市立大学)】

### Room 6

高大接続改革期における大学英語教育の実態調査

近藤 睦美 (甲南女子大学)

東 自由里 (立命館大学)

教育政策におけるグローバル化と標準化。「PISA ショック」「21 世紀スキル」。高大接続改革。学力の三要素。入試改革。共通テストで学力の二要素を測り、個別テストで主体性などで測る。高校の

教育改革で英語教育の目標・語彙などが変わってきている。高校以上の段階で大学の英語教育がどうなっているか。関西圏の偏差値圏 50~55 の 85 大学を対象として調査。共通英語の科目の位置づけ、到達目標、共通シラバスなどを調査。93 学部。95 冊の教科書を分析。英語科目の非必修化。リメディアル化(レベル A1-2)。高大の不接続が起きているのではないか。

代表的な質問は以下の通り。高大不接続は旧制高校から帝大との接続以降、接続はないのではないか/シラバス ECT に焦点をあてている。看護を除外したのはなぜか/A1・2 はリメディアルなのか/単位数は何か、評価の割合はどうなっているのか/選択・必修は区別されているのか。

参加人数は 15 名。

【報告：細川 博文（福岡女学院大学）】

辞書インターフェイスの影響：スマホとタブレットを比較して

小山 敏子（大阪大谷大学）

名部井 敏代（関西大学）

青少年のインターネット利用環境実態調査。インターネットの使用：17 歳 6 時間 20 分。高校生の 99.3%がスマホを使用。辞書アプリ（ウィズダム 2）が搭載されたスマホとタブレットで比較。英検 2 級問題。大学学部 4 回生 36 名でデータをとった。読解問題：スマホの辞書の方が長い。検索語数はタブレット、正答率はスマホ。総合評価はタブレット使用の方が好まれた。これまでは 2017 年のデータ。2023 年、スマホ辞書の優位性を検証。被験者は 10 人。300 語程度の文章を読み、質問に答える。タブレットの辞書を使った単語を確認。今回の調査でスマホとタブレットの違いがなくなった。

代表的な質問：2017 年度、なぜスマホとタブレット使用で正答率が異なるのか？/検索語数と読解の相関はあるのか。辞書を使う前の被験者の読解力は検証しているのか/スマホの場合、辞書の

表示に不必要な広告など何度も現れて意味を見にくい場合がある。その関係は？/タブレットのインターフェイスが「見やすい」という評価/スマホとタブレットのキーボードの違いはないのか。キーボードの使いやすさは関係しないのか/再認課題は調べたかどうかのことか、それが問題になるのか。あとで覚えることと関係があるのか/ビデオ撮影の意味は何か。

参加人数は 8 名。

【報告：細川 博文（福岡女学院大学）】

## 賛助会員プレゼンテーション

### Room1

大学英語教育のためのカウンセリングサービス

株式会社教育測定研究所

TOEICProgramIP テスト（オンライン）のご紹介

一般財団法人

国際ビジネスコミュニケーション協会

電子教科書配信サービスのご紹介

ピアソン・ジャパン株式会社

### Room2

【AI 搭載】e ラーニングの新たな機能・サービスのご紹介

株式会社 EdulinX

学生の話す力を向上させるための GenAI チューターの活用

株式会社 EnglishCentral JAPAN

新 e ラーニングシステム「ALC NetAcademy PLUS」のご紹介

株式会社アルクエデュケーション

## ポスター発表

---

語彙学習の成績に対するメタ認知的モニタリング  
の正確さと自己効力感の影響に関する検討

古荘 智子 (名古屋大学大学院生)

北神 慎司 (名古屋大学)

機械翻訳を使用した実践授業：プレゼンテーショ  
ンの原稿作成とその暗唱からの一考察

瀧村 裕子 (東京電機大学)

小学校向け複言語学習の実践と運営上の課題

岩居 弘樹 (大阪大学)

大前 智美 (大阪大学)

複言語学習を支える留学生の言葉に対する意識の  
変容

大前 智美 (大阪大学)

岩居 弘樹 (大阪大学)

## 閉会行事

---

会長挨拶：森田 彰 (早稲田大学)

実行委員長挨拶：西尾 由里 (名城大学)

次回開催支部挨拶：名部井 敏代 (関西大学)

## 2023 年度 本部 事業報告

### 1. 開催行事関連

#### 第 62 回全国研究大会

開催日：2023 年 8 月 7 日（月）～8 月 9 日（水）

会場：早稲田大学戸山キャンパス

### 2. 総会

開催日：2023 年 8 月 8 日（火）

開催場所：早稲田大学戸山キャンパス

### 3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblog の発行（毎月 1 回発行）

4) Newsletter No. 102 の発行（Web 上で 2024 年 7 月公開）

### 4. 運営業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2023 年 8 月 7 日（月）

2) 理事会の開催：2023 年 8 月 7 日（月）

3) 会長・副会長会議の開催：2024 年 1 月 28 日（日） ハイブリッド開催

### 5. 学会機関誌

Language Education & Technology 第 60 号 2023 年 10 月 23 日（水）J-STAGE で公開

### 6. 学会賞

#### 学術賞

受賞者：中田 達也（立教大学）

対象業績：テクノロジーを使用した外国語語彙学習に関する研究

#### 論文賞

受賞者：中西のりこ（神戸学院大学）・峯松信明（東京大学）・梶原卓弥（東京大学大学院生）

対象業績：未習パッセージを用いた英語シャドーイングの効果 —リスニング力およびスピーキング力との関係—

### 7. その他

賛助会員に対するバナー広告の無料開放

以上。

## 2023年度 外国語教育メディア学会本部 決算報告書

2024年月8日6日

自2023年4月1日～至2024年3月31日

項目	予算額	決算額	内 訳
前年度繰越金	3,667,430	3,667,430	
賛助会費	1,350,000	1,300,000	50,000円 × 26件
一般会費	921,000	921,000	前年度各支部会費収入 × 0.15
雑収入	0	36	銀行利子
収益計(①)	2,271,000	2,221,036	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
収入計(③)	2,363,400	2,313,436	

費 目	予算額	決算額	内 訳
印刷費	400,000	344,300	機関誌60号
通信費	30,000	10,250	切手84円×100、レターパックライト370円×5
ネットワーク関係費	600,000	547,800	本部サーバー管理・業務委託料・ドメイン維持料など
旅費交通費	250,000	205,748	会長・副会長会議交通費補助
会議費	25,000	17,068	会長副会長会議弁当・お茶
全国研究大会開催費	500,000	225,500	LET62大会サイト構築費、猶予会員の申し込み機能追加
事務費・業務委託費等	500,000	346,390	機関誌51号～56号J-STAGE登録作業料
国際交流委員会費	20,000	0	
雑給	0	0	
事務用品費	50,000	44,775	クラフト紙袋、コピー代、表彰状作成等
支払手数料	5,000	3,165	
雑費	50,000	0	
費用計(②)	2,430,000	1,744,996	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
支出計(④)	2,522,400	1,837,396	

当期利益 【収益(①)－費用(②)】	-159,000	476,040	
次年度繰越金 【前年度繰越金＋当期利益】	3,508,430	4,143,470	
当期収支 【収入(③)－支出(④)】		476,040	

以上、報告します。

外国語教育メディア学会本部事務局

事務局長 千葉 敦

以上、相違ありません。

2024年7月30日

会計監査

奥山慶洋 

会計監査

森好紳 

## 2024年度 本部 事業計画

### 1. 開催行事関連

#### 第63回（2024）年次研究大会

日程：2024年8月6日（火）～8日（木）

会場：名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり

大会テーマ：「令和の教育改革 –未来の外国語教育をデザインする–」

**Educational Reform in the Reiwa era—Designing the Foreign Language Education of the Future**

### 2. 総会

開催日：2024年8月7日（水）

開催場所：名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり

### 3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblog の発行（毎月1回発行）

4) Newsletter No. 103 の発行（Web 上で2025年3月公開）

### 4. 運營業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2024年8月6日（火） 名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり

2) 理事会の開催：2024年8月6日（火） 名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり

3) 会長・副会長会議の開催：2025年1月下旬

### 5. 学会機関誌

1) Language Education & Technology 第61号 2024年9月J-STAGEで公開

2) Language Education & Technology 第62号

・投稿申し込み締切：2024年8月31日（土）

・応募論文提出締切：2024年11月30日（土）

・応募論文結果通知：2025年3月

### 7. 学会賞

2024年度学会賞選考委員会における受賞候補者の決定：2024年4月～6月

2024年度学会賞受賞者の理事会承認：2024年6月6日（メール稟議）

2024年度学会賞授賞式：2024年8月7日（水）第63回年次研究大会において

2025年度学会賞候補者推薦締切：2025年3月末日

### 8. その他

1) Scopus への登録申請

2) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放

以上。

2024年度 外国語教育メディア学会本部 予算案		2024年8月6日		
		2024年4月1日～2025年3月31日		
項 目	予 算 額	内 訳		
賛助会費	1,300,000	賛助会費 @50,000	×	26件
一般会費	950,000	前年度各支部会費収入	×	0.15
雑収入	0			
収益 計 (①)	2,250,000			
繰越金 (②)	4,143,470			
法人化準備積立金 (③)	92,400			
収益 計 (①+②+③=④)	6,485,870			
費 目	決 算 額	内 訳		
印刷費	500,000	機関誌61号:491,700円(データ編集費 ¥354,000、J-STAGE登録 ¥51,000、抜刷作成 ¥42,000)		
通信費	30,000	切手、レターパックなど		
ネットワーク関係費	600,000	本部サーバー管理費・業務委託費、ドメイン維持料・受付フォーム作成費・受付処理業務費など		
旅費交通費	250,000	会長・副会長会議旅費などの公務出張の交通費補助		
会議費	25,000	会長・副会長会議他		
全国研究大会開催費	500,000	全国研究大会参加申し込み機能修正等		
事務費・業務委託費等	500,000	Scopus登録に関わる業務委託費		
国際交流委員会費	20,000			
雑給	0			
事務用品費	50,000	文具・用紙・トナー・学会賞賞状作成費など		
支払手数料	5,000	振込手数料		
雑費	30,000			
全国研究大会準備金	2,000,000	2026年度から本部主催にするための準備金		
費用 計 (④)	4,510,000			
次期繰越 (⑤)	1,883,470			
法人化準備積立金 (⑥)	92,400			
費用 計 (④+⑤+⑥)	6,485,870			

NEWSLETTER No. 103

発行日 2025年7月30日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 森田 彰